



図174 昭和31年の遺跡の景観 『先史時代と長岡の遺跡』から転載

遺跡は、周囲に沖積面ちゅうせきめんが広がる、残丘状の砂丘列に立地する。範囲は東西約一キロメートル、南北約一三〇メートルの砂丘全域と推定され、その東端で標高約三メートルの小高い所（図一七四）が遺跡の中心であった。三十一年の調査では、その小高い所が発掘され、平箱約一箱の土器片と、全体が復元できる土器一二点が出土した。土器の表面が磨きあげられたり、ハケ目模様はけめが施されたりした北陸系の土器が約三分の二、縄文や沈線しんせん模様が施され



図173 遺跡の位置
5万分1地形図「内野」

六地山遺跡ろくじやま 西区曾和・内野戸中才・内野潟端・内野早角・田島
六地山遺跡は、昭和三十一（一九五六）年、新潟市域で最初に発掘調査された遺跡である。弥生時代を中心として、奈良・平安時代、中世の遺物も出土している。

翌三十二年には、鳥屋遺跡とや（九八ページ）、緒立遺跡おたて（一一二ページ）が発掘調査され、この時期、越後平野における縄文く古

墳時代の研究が画期的に進展した。いずれも学術調査が目的の発掘であった。

六地山遺跡の三十一年の調査は、燕市の真島衛氏ましまゑが経費を負担し、長岡市立科学博物館の中村孝三郎氏なかむららが実施した。目的は、平野地に展開した弥生式集落の解明、調査期間は五日間、発掘面積は約五六平方メートルであった。

遺跡は、周囲に沖積面ちゅうせきめんが広がる、残丘状の砂丘列に立地する。範囲は東西

約一キロメートル、南北約一三〇メートルの砂丘全域と推定され、その東端

で標高約三メートルの小高い所（図一七四）が遺跡の中心であった。三十一

年の調査では、その小高い所が発掘され、平箱約一箱の土器片と、全体が

復元できる土器一二点が出土した。土器の表面が磨きあげられたり、ハケ目



図175 東北系土器（壺）と北陸系土器（高坏） 長岡市立科学博物館所蔵



図176 アメリカ式石鏃

た東北地方などの系統の土器が約三分の一で、両者の模様を併せ持つものもあった。土器の形は、煮炊きに使う甕、物を入れる壺、盛り付けに使う高坏がほとんどで、赤色顔料で模様が付けられた高坏もあった。ほかに、石鏃と環状石斧が出土し、石器を作った際の石片もあった。また、石製の錐と、糸を紡ぐ道具である紡錘車も石製・土製のものが各一点、この調査までに採集されていた。

この調査では、モミの痕が付いた土器片が八点発見され、米作りがすでに行われていたが、まだ石器が使用され続けていたことが確認された。また、「アメリカ式石鏃」という、基部に逆刺状の突き出しがあり、福島県の天王山遺跡系の弥生文化に特徴的に伴う石鏃が多いことが注目された。しかし、越後平野を含めた周辺地域の比較資料が少ないため、時期はよく分からなかった。北陸系土器と縄文の施された土器は時期が違う、という意見もあった。

六地山遺跡の出土遺物は、現在は、弥生時代後期前半の越後平野の様相を示す代表的資料と評価されている。三十一年の調査で出土した土器は、現在、新潟市歴史博物館で常設展示されている。